

嗚呼岩村透先生

男爵岩村透氏は數年前より糖尿病に罹り本郷區龍岡町の自邸に於て療養捗々しからざるより去る五月中相州三崎町の別荘に轉地し治療に努め居られたが藥石効を奏せず十七日午後五時終に逝去せられた。享年四十八先代高俊氏の長男にして曾て美術學校教授たりし事人の知る處である。曩に洋行して歸朝以來大に我美術界の爲め盡さんとせられしに此の訃を聞くは痛惜の至りである。十九歳の時先生は青山學院に學び十九歳の時同校を卒業して米國のコロネル大學に遊學し歸朝は明治三十年頃で同三十三年に東京美術學校の教授となつて美術史を講じて居られた。其間再び私費で米國に留學せられ後同校を辭して佛蘭西に行き一昨年歸朝すると間もなく慶應義塾大學の講師となられ、昨年九月宿病の爲め講師を辭して今日に至つた。

岩村先生を知つたのは比較的に近い事で、確か大正三年頃であつたらうと思ひます。本誌に「ミリナの人形」を紹介したのが美術新報と私との關係がついた始めで、一方には本紙が私を岩村先生に紹介したこゝになりました。

私は話の題目を「ミリナの彫像」とつけて居りました處岩村先生の御注意によつて「ミリナの彫像」と變更したのを記憶して居ります。其後色々機會のある度び度び先生に面接してあれこれ指導を受けたのは決して少くはないのでした。先生は近代藝術に就き深い理解を持たれたこゝは云ふ迄もない、が同時に私が専攻して居りました希臘藝術—其希臘藝術には別けて多大の同情を寄せられ、常に私を勵して言はれるには『日本の様な淺薄浮華な風潮や思想の國に君が兎に角金にならない研究を以て世に立たうと云うのは實に愉快だ』と言つて心から私を勵まされた事は今日も忘れられないのです。私は岩村氏に約束してあつた事も一つや二つではなかつた。夫れは「美術に現はれたる希臘と日本の風俗比較」の如きは其一つで是非研究を發表する様にとお勧めを受けながら、未だ其端緒にも取かゝつて居りませぬ。其他先生の切なるお勧めで書き綴つた「希臘の彫刻」の如き、未だ書肆の手にあるのみで、先生の墓前に獻じ得る日は遠いとだらうと思ひます。

忙しい本誌との關係は先生が病床に就かれたと聞いても、お伺ひは出來ず、而して限りなき未來まで再び先生の説を承る事が出來ぬ事は申す迄もなく痛恨の極みであります。斯様に述べて來ますと丸で岩村先生と私が個人としての關係を繰り返して居る様であります、聽て讀者諸君と私の關係が間接にしろ岩村先生の仲介を経たと思ふ

ことになるのです。尙ほ私と讀者諸君が同様に岩村先生を忘れてはならない一大事實は美術新報の創立と先生との關係であります。世人は昨今此事實を表明するとを避けて居る様であるけれども本誌をして我國に於ける最も權威ある美術雜誌たらしめたのは少くも岩村氏が後見役となつて盡されたからであります。

先生は甚だ讀書家であつた、而して社會の出來事に就いて非凡なる批評眼と識見を持つて居られた。其の犀利なる辯筆は動もするも勢ひ埒外に奔逸するの恨みは絶對的になかつたとは言はれませぬが、自説に就いて堅い自信の上に極めて明快なる論理的説明を與へられました。

先生の長逝された悲みにも氏の性格を語らうとする程不敬不遜では斷じてありませぬが徒らにさうかする人が亡くなつた瞬間から種々讃辭を並べる習慣は世間の禮儀であるかも知れぬが心なきこゝだと思ひます。或は却つて其人生前の意志に反對な言説を敢てする人があります、私は恥しい事だと思ひます。斯う云ふ事は岩村先生は大嫌ひでありました。

岩村先生は、舉動の公明正大で天真なるを喜ばれた。而して理智の先生には強い感情が又加はつた事も見られ得るのです。氏は幼きより米國に渡りコロネル大學に學ばれ常に其行動が力行主義であつた事も其近しくして居た人は充分認めたこゝと思ひます。若し氏に天壽をかし議政壇上の一席を與へたならばごんなにか我が振はない美術行政の上に力があり頼みになつた事と思はれます。氏は當面の敵としては何物にも屈しないと思ふ氣性でありましたから愚昧な上院の人達はごんなにか氏を恐れもし又氏の辯舌に教育された事であらうと思へば更に先生の長逝を惜む念が新になります。今我が美術界を通覽すれば氏の力をもつて借りなくてはならぬ事が極めて多い、不具な日本の當今の文明又將來の事を考へた時氏のやうなラヂカルな人を亡くした事は多大の損害と言はねばなりませぬ。吾人は謹んで茲に弔意を表したいと思ひます。

大隅 爲三